



生活困窮家庭の子どもたちと つながる活動に関わって

「普通」を超えて出会い、 共に世界を広げていく

子どもの貧困

一般社団法人Atlasは、滋賀県で「子ども若者支援」や「子どもの貧困対策」の活動をしている団体で、活動を始めて12年目、法人化して3年目を迎えます。いわゆる「子どもの貧困」に関する書籍が次々に刊行され、テレビでも取り上げられるようになった「子どもの貧困元年」が2008年ですが、その前年から活動を始めています。親の貧困が子どもの貧困につながっているのが「貧困の連鎖」で、生活困窮家庭の子どもは、成人後も生活困窮となる傾向にあります。そのため当時は特に、生活困窮家庭の子どもたちの高校進学率が低いことに注目が集まっていました。そこで、彼ら彼女らの学習補助や学習機会の確保を、無償または低額で行い将来の自立を支援するという取り組みが、全国的に見られました。

私たちもその目的と枠組みで活動を始めた団体の一つでした。

価値観の変容と葛藤から 生まれた一歩

私がこの活動と出会ったのは、2011年春のことです。大学3年生から4年生への変わり目の時期で、色々な自分の想いと出来事が重なってこうなったのだなど、今振り返って感じています。

当時の私は、経済学部で「子どもの貧困」や「奨学金」問題に触れたり、教職課程の授業で「文化的再生産」や「オルタナティブスクール（非正規の教育機関）」等に触れたりしながら、学校や教育を取り巻く色々なことに衝撃を受けていました。「貧困問題って実際にあるんだ…」と思いましたが、他方で自身の奨学金のことや何人かの友人を見て、「あ、確かにあるわな。でも、自分には見えていなかったし、見ようとして



日野 貴博

一般社団法人Atlas 代表理事

【ひの・たかひろ】

1990年に愛媛県で生まれ、大学進学後滋賀県に在住。「相談を身近に気軽に」をテーマに、主に子どもと若者を対象としたソーシャルワーカーとして活動中。東京ヤクルトスワローズファン歴25年。

ていなかったんだな」という想いが、日に日に高まっていました。併せて、まずはもつと「子どもの貧困」を知りたい、それから自分でできることを模索したいという想いも高まっていました。

私自身、学校ではいわゆる優等生をずっとやってきたのですが、その一方、自分が何をするにも自信が持てず、勉強ができなくても話に説得力があったり行動力があつたりする友人たちを見て、コンプレックスを感じていました。

そんな中、大学の授業のフィールドワークとして訪れたオルタナティブスクールで「自分で考え、決断し、行動し、発言し、自分で責任を持つ」姿勢を身につけた10歳前後の子どもたちと出会いました。その時、「この子たち格好ええなあ」と思いましたし、「私も自分なりに頑張ってやってきたけど、私は学校文化で何を身につけたのだろうか？」と学校文化やシステムへの懐疑的な想いも

生じました。そこから「こういう教育実践に関わっていきたい」という想いを強くし、そのような活動を探し回っていました。

そんな話をあちらこちらでしていると、別の大学サークル活動で知り合った社会福祉協議会の方が、Atlasのことを紹介してくれました。ただ、その時は、定期的に中学受験が終わりAtlasが活動していなかったため、活動を再開する秋まで待つという話になりました。

待っている間、大きな出来事がありました。東日本大震災です。私は発生当時、教育実習の打ち合わせのために訪れた母校の職員室にいました。テレビに映し出される津波に流されていく家々、東北・関東エリアに受験に行っている生徒へ安否確認の連絡



「子どもの体験活動事業（ほのぼのハウス）」でつくったAtlasのポスト

を次々にしている母校の先生たち、その後の原子力発電所のメルトダウン、家や家族、職を失った人たち…。被災地の方々の安否を気遣うとともに、「自分もいつ死ぬか分からないし、『普通』や『当たり前』が突然崩壊することもある。後悔のないように、他人や『普通』に合わせたり比べたりするのではなく、自分のオリジナルの人生を生きよう」という価値観が芽生えました。

将来の進路については、教師になる、民間企業に就職する、大学院に進学する等色々な選択肢の中で葛藤が生じましたが、結局はこの時に芽生えた価値観が、今の人生にとっても大きな影響を与えたと感じています。

「普通」の崩壊、 後戻りできない出会い

待機期間を経た2011年秋、私はAtlasの活動に初めて参加しました。実際に子どもたちと触れ合ってから、もう後戻りはできなくなりました。そこで出会った生活困窮家庭の子どもたちの中には、学力の低い子、学校に通えていない子、リストカットをしている子、「家に帰ったら祖母に叩かれるから」と帰りがたらない子、病気の親に代わって家事を全部やっている子等々、色々な子どもたちがいました。もちろん生活困窮家庭の子どもが皆そうではないですが、やはり数として多いなど感じましたし、これまた自分にとっての「普通」が崩壊した出会いでした。

「子どもの貧困」というマクロ的な問題に対して「長い年月をかけて関わる人が必要だな。でもそんな人は現時点では多くないし、とりあえず自分がやってみよう」という想いと、「出会った目の前の一人ひとりの子どものため少しでも力になれば」というミクロ的に実践したい想いの双方が重なって、私は活動から抜けられなくなっていったように思います。

活動に参加して2〜3か月頃には、当時医学部5年生だった団体発足時の代表に「俺医者になるから、後は頼んだ」と言われました。その時「これでどうとう後に引けなくなつた」という想いも入り混じりながら代表を引き継ぎ、今に至っています。

一歩からオリジナルの人生に

Atlasが活動を始めた2007年当初は滋賀県大津市での活動でしたが、2012年から滋賀県守山市でも活動を始め、今では守山市のみの活動となっています。

現在の活動は、それぞれ週1日、夕方に2〜3時間行う「生活困窮家庭の子どもの学習・生活支援（カンフォラ第2の学校）」と「子ども若者のフリースペース（キャンパス）」、長期休み期間に行う「子どもの体験活動事業（ほのぼのハウス）」の3つを柱にしています。いずれも原則無料で子どもたちが参加できる形で行っています。

活動を続けていく中で様々な人にお力添

えいただきました。また、生活困窮者自立支援制度により一部有給の業務をつくることもできるようになりましたが、今でも多くはボランティアでまかなっている活動です。そのため、私も活動に参加した当初から現在まで、他の仕事でも収入を得ながら、Atiasの活動に関わっています。

私はせっかく仕事をするのであればAtiasの活動に活かせることがしたいと思います、その視点で仕事を選んできました。

例えば、子どもと関わる中で、その親も含めて「今の世の中でどのような具体的な生きづらさが生じているのか」を知りたいと思います、生活相談員の仕事を始めました。その中で「生活困窮」と「社会的孤立」の関連に気づき、もつと地域社会のことを知りたいと、社会福祉協議会に入職していた時期もありました。その後「子どもは家と学校と地域の中で生きている」という想いもあり、学校の中でソーシャルワークをするスクールソーシャルワーカーとして仕事をするようになりました。

自分の履歴書を書けば非正規や転職が多く、私を知らない人を見ると「こいつは大丈夫なのか?」と思われそうです。しかし、色んなご縁をいただいた中で自分で選んできた道なので、自分なりにはそこそこ満足できるオリジナルなキャリアを歩めている気がします。

色々な葛藤がある中で関わり始めた一つのボランティア活動の一步が自分のキャリアの

ターニングポイントになったと思うと、人間何がきっかけになるか分からないものだなあと思います。また、それなりに自分で考えたり悩んだり、動いたり、目の前のことに真面目に取り組んでいくことで、自分の人生を豊かにしていくことができるのだろうなあと感じていきます。そしておそらくこれからも、ソーシャルワークやAtiasの活動という柱の部分は大きく変わらないうえ、その中で自分の「やってみよう」という気持ちが、変わっていき、そんな変わり続けていく自分を楽しみにもしています。

子どもたちにも居酒屋を

Atiasの活動では、基本的にはどの活動も子どもは10〜15名程度で、一人ひとりの子どもたちに大人が丁寧に関わっていくこと、出会っていくことを大事にしています。

特に「生活困窮家庭の子どもの学習・生活支援（カンフォーラ第2の学校）」と「子ども若者のフリースペース（キャンパス）」については、カリキュラムやプログラムを決めず、その日その時、参加した子どもたちが過ごしたいように過ごしてもらおうことを大事にしています。勉強をしている子やボードゲームをしている子、家族や友人、学校や進路について相談をしている子もいれば、寝ている子もいる…という具合です。

これには色々なねらいがあります。「オルタナティブスクール」的な教育実践―強制

されない空間で、自分（たち）の時間を主体的に自分（たち）で考えて使っていくことで、子どもたちの生きていく力を育てたいというのの一つです。

また、私は生活相談員をしていた中で、「真面目過ぎる／アソビがない人」や「自らの居場所や趣味、発散できる何かを見いだせていない人」からの相談が少なくないことに気づきました。スクールソーシャルワーカーの仕事で色々な子どもたちに関わっていると、塾に習い事に…と、生活困窮家庭の子どもも少なくても、アソビがなく、窮屈そうでしんどそう、それゆえに日常に色々な困りごとやトラブルが生じている子どもたちが少なくないと感じていました。

そういう意味で、Atiasに参加している子どもたちが、「自ら居場所をつくっていく」ことや「主体的に何かに参加する」経験ができたり、アソビのある空間、息抜きや発散のできる空間をつくっていくことで、生きる力を育んだり、しんどくなる前の予防ができたらいいなと思っています。

例えば、大人にとっては居酒屋や銭湯のようなサードプレイスと呼ばれる場所を、子どもたちにもつくれないだろうか。愚痴を吐き出したり、頑張っていることを聞いてもらったり、友達に言えないことを相談したり、時に一人になりたかったり、そんな色々を受けとめたり応援したり見守ってくれる誰かがいたりといった居酒屋のような空間をつくられたらいいなと思います、日々活動



卒業式で集まったAtlasの子どもたちとスタッフ

結局は人間と人間の出会い

しています。もちろん、お酒は抜きで。

活動を長く続けてきたからこそその「やりがい」もあります。出会った頃は中学生だった子たちが、高校生になっても参加し続け、大学生になったり、社会人になったりしています。その成長を見続けられると言ったら偉そうな気がしますが、小規模でやっている分、出会う子どもたちに対しては自分が親戚や近所のお兄さんのような気持ちになるというか、情がわくので、「ああこんなにも格好良くなったか」と、最近は感慨深

い気持ちになることも少なくありません。

「20歳になったら一緒に酒を飲もう！」と伝えてきた子たちが何人かいました。その中にはとても大変な状況で何とか生き抜いてきた子もいます。そのような状況で、約束が叶った子と、ただ一緒にお酒を飲んだだけです。が、それだけでとても嬉しかったものです。何人かの子たちは高校卒業後、ボランティアとして活動に関わってくれています。その子たちが、今の小中学生たちに対して「俺たちや日野さんが、ここ一番のベテランやからな。何でも聞きや」と言った時がありました。その言葉を聞いて、「まあなんと頼もしい」という想いになりましたし、「格好良く育ったなあ」と、これも嬉しかった瞬間の一つです。

他にも、毎年バレンタインの日だけに、「友チョコの練習でつくったから」と大量のチョコを持ってきてくれる子がいたり、「スタッフさんがケガしないように、俺も一緒にのこぎり使わう！」と言ってくれる工作好きで調子乗りの子がいたり…。そのような優しさや、その子自身が持っている力を発揮してもらえる場面に日々出会えるのも、この活動の醍醐味だなあと感じています。

一人ひとりの「これやりたい！」が違うので、それに応じる形で私たちは準備したり体験したり教えてもらったりし、彼女ら彼らを通して私たちがも自らの世界や引き出しを広げてもらっている気がします。そして何より、彼女ら彼らと関わっていると、

今の社会状況でこんなしんどきがあつて、こういう方法で何とか凌いでいるということとを、色んな部分で教えてもらえます。

彼女ら彼らに対してはその中を生き抜いているというだけでも、やはり敬意を覚えます。その上、素敵なところも見させてもらえて、世界を広げてもらえて、長く付き合ってもらえて…。良い出会いをさせてもらったなあと感じることもしばしばです。

もちろん「支援する側／支援される側」という立場はありますが、それだけではない人間的な付き合いや出会いができてきたからこそ、私はAtlasの活動や今のライフスタイルを続けているのだらうと思います。

出会い、広げ、変わり続けたい

これからも出会った子どもたちと共に世界を広げ、私自身変わり続けていけたらいいなと思います。さらに、引き続き仲間を増やして、今のAtlasでは出会えない、別のニーズを持った子どもたちにも届けられる何かを模索し続けたいと考えています。

スクールソーシャルワーカーとして学校で仕事をしていると、準備された相談の枠組みや相談室には足が向かない子たちが少なくないと感じています。めっちゃめちゃしんどくなる前に、「もつと相談を身近に気軽に」そんなことを体験してもらえる実践を、ソーシャルワーカーとしては積み重ねていきたいと思っています。